

伊東にて

柴

舟

うちよせし波の白泡消ゆる音岩間にひびき日ぞまひるなる。
折りかへす波の穂尖の青光強く眼を射て夜は更けにけり。
つゝましく朝の海にむかひ居り大空仰ぐ時のこゝちに。
春の日の夕さりくれば伊豆の山段々畑の麥ぞけふれる。
あきらかに一重櫻ぞゆらぐなる御寺の山の春の青きに。
草山のあしたの緑あかるくも鶯ぞなくあわれ鶯。
さくら花青白くさく繁山のみごりにむかひ歎きをぞする。
さ夜ふけてひたる温泉の青黒き中にしろくものびし手足よ。
鳥もるぬ汐干のあさの砂原にわれあたらしきあどつくるかな。
うすぐもる春の日の下ほのにはふ彼岸櫻のものたよりなさ。
ふすくと野火の煙の立ち迷ひ古草にはふ山のいただけ。

町の子

千葉安良

先生といふものなりと知るまゝに知らぬ我れにもお辭儀する兒等。
お辭儀して二足すきて立どまりわつと笑へる時なごもあり。
あの先生お辭儀好きよと町の子かかたへのちごにさゝやきてあり。
運動會徒歩競争のスタートに笑まひて立ては思ふことなし。
赤よ勝て白まくるなどをたけひて手ふり足ふり遊ひつる今日。
年若き同僚の三人と丘の上に唱歌して笑む心かろき日。
疲れてふことを知らざる人になご生れ來ざりし母の老います。
思ふことおもふが如く爲し得る日必ず來とは思はずなりぬ。
ゆすらの實紅寶玉の様なるを濡れつゝぞつむ五月雨の頃。
若草に提灯の灯のほのかにもうつるをめでて通ひける道。

ゆすらの實

L.

T.